

報徳かわら版

いまを充実させ、

未来を発展させるために

(豊頃町民憲章より)

豊頃町に根づいている「報徳のおしえ」をよく知り、自分のもっている徳（技能、特技など）を、自分や周りの人々のために生かし、明るく住みよい町づくりに努めましょう！

報徳って 何だろう？

「報徳」とは、自分が受けた恩や徳に報いることです。江戸時代末期に、全国各地で「報徳仕法」を施し、多くの村や地域の経済的な窮状を救った二宮尊徳が説いたおしえを表す言葉として知られています。

尊徳は、この世の全てのものや人には、徳（よさなど）があると考えました。そして、様々な徳によって、自分は生かされていることを悟りました。ですから、自分のもっている徳を生かし、自分に徳を与えてくれるものや人に報いることの大切さを説くとともに、自ら報徳を実践して農民の自立と、村や地域の復興に尽くしました。

二宮尊徳と報徳訓

報徳の悟りを拓いた尊徳は、幼少の頃から、不遇な環境に遭遇しましたが、その困難さを克服し、悟りを「報徳訓」に表しました。



二宮尊徳

(1787~1856)

報徳訓

父母の根元は天地の令命に在り
身体の根元は父母の生育の在り
子孫の相続は夫婦の丹精に在り
父母の富貴は祖先の勤功に在り
吾身の富貴は父母の積善に在り
子孫の富貴は自己の勤労に在り
身命の長養は衣食住の三に在り
衣食住の三は田畑山林に在り
田畑山林は人民の勤耕に在り
今年の衣食は今年の産業に在り
来年の衣食は今年の艱難に在り
年々歳々報徳を忘るべからず



尊徳像 (役場前)



報徳訓に書かれていることは、次のような内容です。

1 われわれ人間の肉体的生命は、父母先祖から子や孫へと伝わり、終わることのない永遠のものである。

2 この天から与えられた生命を支えているのは、富貴である。富貴すなわち衣食住に恵まれ、豊かな社会生活、文化生活を営むことができるのは、父母先祖代々の勤労・善行のおかげであり、自分一代でできたり、無くなったりするものではない。よくこのことを感謝し、勤労努力して子孫へ受継いでいかなければならない。

3 その富貴のもとである生産は、田畑山林(自然)の恵みと、これに積極的に働きかける自己の勤労によるものである。

4 昨年の生産で今年の豊かな生活ができ、今年の生産で来年の安全な生活が成り立つように、計画的な暮らし方(分度~推譲)をしなければならない。

5 これを貴くためには、天地自然の恵みや、父母祖先をはじめ、多くの人々の社会的協力のおかげで現在の自分が存在することをよく自覚し、至誠をもって実行しなければならない。

尊徳が、報徳訓に表したような悟りを拓いたのは生い立ちと深く関わっています。

尊徳は、現在の小田原市栢山で、農家を営む二宮利右衛門の長男として出生(1787年)しました。その後、14歳で父親、16歳で母親が他界しました。長男である尊徳は、田畑や家を処分し、二人の弟を母親の実家に預け、自分は伯父の万兵衛宅に身を寄せました。当時は江戸時代。封建制度に縛られた社会

でしたので、尊徳は、二宮家の再興に向けて、昼夜、勤労と勉学に励みました。本を読みながら芝を担ぐ金次郎像は、その頃の姿をイメージした像です。

やがて、尊徳の血の滲むような努力が実って、二宮家は再興し

ますが、報徳訓に結びつくような体験が逸話として語られていますので、紹介します。

〈逸話〉

両親が亡くなり、伯父の万兵衛宅に身を寄せていた金次郎は、ある日、所有地に向かう畦道に苗が捨ててあるのを見かけた。当時の栢山村では、よく見かける光景であった。金次郎は、その苗を拾い、酒匂川の不要となった用水堀をかきならし、苗の植え付けを行った。その後も草取りや水回りにも気を配って世話をしたところ、思いのほかよく実り、秋には米一俵の収穫をすることができた。金次郎は、この収穫を基に、年々貸付を繰り返して財を増やしていきました。

金次郎は、この体験から、作物の世話をすると、自然は大きな恵みをもって応えてくれること、その恵みの中で人間は生きていることなど、報徳訓に結びつく多くのことを、自ら体験を通して学び取っていきました。

上記の逸話は、「積小為大」の法則の基になったものとされています。尊徳の報徳訓は、不遇な環境の中での体験を通して悟られ、自らそれを実践して、家を再興し経済的な自立を果たしました。

報徳仕法として

村や地域の財政再建

自家を再興した尊徳は、自らの体験を生かして、周囲の人々や奉公先の武士の借金返済などの手助けをしていましたが、その評判が広まり、小田原藩服部家財政の復興を依頼され、着手して成し遂げました。さらに、その成果が評価されて、小田原藩主大久保忠真から桜町（現栃木県真岡市）の財政建て直しを命じられます。

桜町の仕法では、田畑の荒れ以外にも、村人たちの荒んだ心を改めることにも心血を注いだと言われていますが、10年余り取組んだ仕法は実を結び、桜町の財政は再建されました。以後、常陸国青木村などの仕法を任せ、多くの村や地域で立直しに成功したと言われています。

晩年は、江戸幕府の直轄領の仕法も依頼され、取組んでいましたが、病状が悪化し、長男弥太郎に引き継いだ後、1856年、70歳で病死しました。



報徳四綱領

二宮尊徳の説いた報徳は、以下のような4つの内容に集約されて伝えられています。

至誠 ～「報徳のおしえ」の中心（土台）となるもで、「真心・まこと・ひたむきに」などの意味があります。

勤労 ～「まじめに一生懸命働くこと」です。目標を持って計画を立てて、働くことの大切さを説きました。

分度 ～「はかり分けること」です。自分のおかれた環境や立場をわきまえたり生かしたりしながら、生活することです。

推譲 ～「ゆずること」です。余ったお金を、家族や子孫に残す自譲と他人や社会に役立てる他譲に分けられます。



二宮尊親

(1855～1922)

この写真の人物は、二宮尊親です。有名な二宮尊徳の孫で、豊頃町の開拓に大きな功績を残した人です。

二宮尊親の出生と相馬仕法

1855年、下野国都賀郡今市町で、二宮尊徳を祖父、二宮尊行を父として出生しました。

1868年、相馬藩の仕法に招聘されていた父とともに、戊辰戦争から逃れるために、相馬藩（現在の福島県）に移り住みました。やがて成人した尊親は、相馬仕法の手伝いをします。相馬仕法は、1845年から始められ、1869年に中断するまでの27年間にわたって続けられました。多くの村で仕法が完成し成果をあげていたといわれていますが、1871年（明治4年）の廃藩置県にともなう、明治政府や福島県の方針により、仕法を継続することは困難になりました。また、同年の父の死後、相馬での仕法の理念を引き継いだ尊親と尊徳の一番弟子の富田高慶は、官営での仕法を諦め、自ら興復社を結成し、仕法の継続を決めました。



興復社と尊親の新天地視察

明治10年に結成された興復社は、当初、相馬で順調に事業を行っていましたが、やがて事業多角化による多忙、報徳金の未納などの問題が表面化し、資金繰りが困難になりました。重ねて、興復社の大黒柱であった富田高慶が、明治23年に病死してから、社としての事業の継続が一層困難になりました。このような状況を踏まえて、興復社は会議を開き、北海道への事業の移転を決めました。当初は、国策として進められていた北海道開拓でしたが、尊親は、

尊親は理想とする移住地を、次のように考えていました。・大平原の中央ではなく、丘か山に接しているところ ・土地が肥沃で、水害の無いところ ・運輸、交通に便利なところ



北海道に移住した開拓団には、事業に失敗するところもありましたが、興復社は成功した例でした。

北海道の「北海道土地払下規則」なども調べた上での移住の決定だったといわれています。

尊親は、移住するに当たり、明治29年に興復社員ら数名とともに、事前に北海道の調査に入りました。未開の土地が多かった北海道でしたが、明治の後半ともなると、石狩や空知などでは、尊親の理想とする土地は見つかりませんでした。

そこで、十勝の地に思いを託して探見することになりました。十勝開拓の玄関口である大津に着き、アイヌの若者の案内で報徳二宮神社の建っている高台(丸山)に登って、ウシシュベツ原野を発見しました。そこはまさしく、尊親が理想とする土地でした。尊親は、相馬への帰り道に札幌に寄り、道庁へ土地の払下や移住の事業計画などを申請して帰路に着きました。

興復社の北海道移住

北海道視察を終えて、相馬に帰った尊親は、急いで移住の準備を始めました。移住民規約の作成、興復社総会、移住民の募集、ウシシュベツへ送る資材の調達など、短期間に目まぐるしく移住のための支度を整えました。



興復社の旗
(郷土資料室)

ウシシュベツ発見から、およそ7ヶ月後の明治30年3月、移住民を率いてウシシュベツに向け出発

しました。入植したのは、先住していた4戸を含めた19戸(1戸は、後日相馬から参加)でした。

その後、移住は、明治34年まで5期にわたって続けられ、後期・半期移住民などを含め延べ160戸959人が入植しました。

開拓は困難を極め、衣食住の全てが不足する中、谷地坊主だらけの原野を、粗末な農機具で開墾していきました。このような艱難辛苦の開拓が実り、二宮農場は、畑844町歩、橋の建設61箇所、道路13200m、排水51000mを整備するに至り、農場の経営は軌道にのりました。

興復社(二宮農場)が成功した理由

尊親の率いた興復社が、開拓団として成功したのには、幾つかの理由があります、その主なものを考えてみましょう。

〈理由1〉

尊親が理想の一つとしたのは、個々の農民が自立自営できるようにすることにありました。これは尊徳の理想でもあり、父尊行とともに相馬での仕法で実践していた頃からのものでした。また、入植した人々も、自ら開墾した土地が自分の畑になるということを励みに、苦難に耐えて努力を重ねました。理想とすることを実現するために計画(仕法)を立てて、入植した人々とともに確実に実行した(できた)ことが、成功の要因でした。

〈理由2〉

農場内の組織を整え、二宮に合った運営や実践に当たりました。

- ・尊親は、概ね10戸毎に班を組織し、什長と呼ばれる代表を置きました。什長は、什長会議に出席し、農場内の運営などに関わる諮問をしていました。また、班内では相互扶助で助け合い、班の間では開墾の成果などを競い合いました。
- ・毎月20日に「芋こじ」と呼ばれる例会を開いて、お互いに実践や成果などの発表を通して、切磋琢磨し合いました。
- ・努力して成果をあげた人を、力農篤行者として選び表彰しました。什長は、この力農篤行者の

中から選ばれることが多かったそうです。

〈理由3〉

尊親の二宮農場での実践の基にあったのは、「報徳のおしえ」でした。農場内では勤・儉・譲（仕法）をもって厳しく律する生活を実践するとともに、例会（芋こじ）では報徳を説いたと言われています。

尊親の二宮農場に合った仕法を、卓越した指導力で導いた結果が、開拓の成功として結実しました。



茂岩の尊親が暮らした住居

牛首別報徳会の設立

第1期移住民が入植してから5年後の明治35年人々の中から「報徳のおしえ」を実践する団体として、牛首別報徳会が設立されました。興復社の指導の基で、農場内で大きな役割を担っていきました。

晩年の尊親

尊親が移住民を率いて牛首別に入植してから10年後の明治40年4月、農場の経営が安定したことを見届け、尊親は、福島県中村町に移転し、尊徳の遺稿などの整理・編集・著作に当たりました。その後、福島県農行銀行取締役、中央報徳会役員、大日本農会役員等を歴任しましたが、忙しい中、年に2、3回は豊頃を訪れて、農場を見守ったそうです。また、大正8年から報徳実業学校長も務めました。しかし、大正11年11月16日、急性肺炎で病没しました。

遺骨は、東京駒込吉祥寺に埋葬されました。後に、牛首別報徳会などの強い要望もあり、分骨が許され、豊頃での墓は二宮構造改善センター横に建てられ、豊頃で亡くなった五女ヒデや五男五郎の墓碑も、その近くに寄り添うように建てられています。

尊親の功績

豊頃での尊親の功績は、未開の原野に移住民を率いて入植し、経済的にも身分的にも自立した農民となるように、「報徳のおしえ」に基づいて導き成し遂げ、本町開拓の基礎を築いたことにあります。

北海道には全国各地から開拓団が、それぞれに目標をもって入植しましたが、多くは様々な要因により思うような成果をあげられなかったことを考えると、無から有を生じさせるような尊親の事業の成功は、まさしく偉業でした。

今こそ「報徳」を！

豊頃町は、尊徳の孫である尊親が「報徳のおしえ」を受継いで、開拓が進められた町です。ですから、「報徳のおしえ」は、町民憲章に位置づけられ、今もその精神が生きています。私たちも、その価値を、今の時代に合わせて問い直し、自分の生活の中に生かし、豊かで潤いのある人生を築くとともに、明るく住みよい町づくりに努めましょう。



栢山の二宮金次郎生家

〈様々な活動例〉

- ・自分の興味や関心のある学習活動をする。
- ・同じ興味や関心をもつ人々とグループで学習や活動をする。
- ・自分のもつよさ（技術・技能など）を、身の回りや社会に生かす。
- ・青少年健全育成活動、地域美化活動などの地域活動に関わり参加する。
- ・自分の属する町内会や組織で困ったことなどを話し合い、お互いに力を合わせて解決する。
- ・自らの生活などを勤・儉・譲の観点から見直し、報徳のおしえを生かした生活をするに心がける。など、多くの活動が考えられます。



これまでの自分や団体の学習・活動を大切にしなが、新しい自分の人生と町づくりに、進んで報徳を生かしましょう！

【主な参考文献】

- 今こそ「報徳」 豊頃町教育委員会
- 二宮尊親に導かれて 豊頃町教育委員会
- やさしい「報徳のおしえ」 豊頃町教育委員会
- 報徳百年 牛首別報徳会
- 報徳のおしえQ&A 笠松信一著・発行
- 二宮尊親の北海道開拓 龍溪書舎
- 二宮金次郎正伝 モラロジー研究所 他

発行 豊頃町教育委員会
作成 豊頃町教育研究所
" 「報徳のおしえ」推進会議
協力 牛首別報徳会
発行日 平成23年8月